

昔、其れから、そして今。

主にクラシック音楽を10代の後半から聴き始めて約50年を過ぎるようになりました。自分でも思いがけ無い程の時間です。その間の音楽体験も聞き方、対象音楽の変化、等々があり今日に至ります。多くの中で次に上げた作品は極めて印象的に感じています。当初は聞くことは敬遠するほどでした。その後の変化で心に残る印象的作品となりました。その変遷をお話したいと思います。

1. シューマン；交響曲第三番「ライン」

この作品の冒頭部門の分厚い和音は20代の私にとって受け入れがたいものでした。当時の好みの音楽は喜怒哀楽の強い作品、色彩感覚の濃度、静謐な和音の作品に憧れました。この分厚く雲が掛り、不透明な、焦点が茫洋な感じがして感覚的に認めがたい程でした。極端に言えば生理的嫌悪感を感じました、その後40代に手が届く歳になりこの多層な広く、深い和音に寛容、懐の深さに目覚めました。若い時の自分の理解の足りなさに恥ずかしい思いをしました。

2. マーラー：交響曲第2番「復活」第2、3楽章

マーラー音楽全体をこの楽章だけで語ることはできません。また、私の理解が単なる個人的鑑賞の域を出ない程度です。30代から40代前半に聞き始めて結局は理解できず「精神分裂症の音楽」と見なした次第です。その後の再挑戦は音楽鑑賞では無く少しばかりの音楽史を通読し、19世紀末の社会思想を知ることが聞き方の方向転換でした。西洋近代の問題提起の時代です。マーラーの音楽の枠組みでは古典的。然しながら表現は20世紀音楽に通じ脱近代と感じました。そこには遥かに現実的表現でした。初めて私の音楽観も古典派、ロマン派音楽から新しく感じる20世紀音楽に耳を傾ける機会を与えてくれました。その後のマーラー体験は不慣れな20世紀音楽まで導いてくれました。結局、聞き始めから音楽として違和感なく聴くようになるには50代半ばに至り20年を要した次第です。

3. シェーンベルク：「月に惹かれたピエロ」

20代に聞きました。いつ聞いたか覚えていませんが重要な曲で20世紀を代表する音楽との解説です。一聴にして気狂いの音楽と感じ、それ以後試聴対象に成ることは無く忘れた作品でした。前述の音楽史の続きですが対象音楽作品のCDを借りる図書館で「武満徹」全集と出会いました。日本が誇る世界的作曲家の管弦楽曲を聴き、其処には日本的感性が仮の西洋音楽を纏い本籍は日本である、そんな感じです。此れを聞いて「月に惹かれたピエロ」を思い出しました。私には類似性を感じたのです。武満徹を聞いているうちにこの曲を思い出し、何かを伝え、表現している音楽を感じました。若い時に聞いた感覚は薄れ全く言ってよい程新鮮な音楽の始まりを得ました。もちろん好悪の問題、日常で聞く音楽ではありませんが新しい地平線を見せてくれました。

使用CD：シューマン：カラヤン指揮、ベルリン・フィル、429674-2，グラモフォン

マーラー：Gary Bertini 指揮、ケルン放送交響楽団、9463402382，EMI

シェーンベルグ：ブルーーズ指揮、Ensenle InterContemporain, 457630-2，グラモフォン

以上。